

は渡良瀬川まで行ったんだろうというような解釈をしていたのですね。ところがだんだん発掘調査が進むにしたがってどうやら藪塚にも昔しっかりとした川が流れていたということが分かりだしてきた、というお話でした。

地域というのは刻々と変化してまいります。人間生活そのものが変化する場合がありますが、昔の場合は自然環境が変化することによって生業が変わっていくこともあるわけですね。自分たちの住んでいる所がどういう所かということ調べるためには今ある地形だけでは理解出来ない、やっぱり考古学の成果を取り入れながら自分たちの地域の変化を検討したいというのが遠坂さんの考えだろうと思います。ひょっとしたら藪塚本町にも昔は漁師がいたんじゃないかというお話をしておられましたけど、そんなことを考えながら皆さんも自分たちの郷土を見直す必要があるのではないですかという訴えだと思えます。

私は20年くらい前に大間々扇状地地域の遺跡分布調査というのを3年間くらいに渡ってやったことがあります。その時かつて泉だったところ、今も水が湧いているところ全てを調査しました。そうしますと自然に水が湧いている泉もあるんですが、そのほかにもどうやら人工的に掘られた泉もあることが分かってきました。

簡単な見分け方をお話ししますと、谷の一番上、谷頭、谷の中から湧いている泉はおそらく縄文時代以前からずっとそこから湧いていたんでしょう。そういう所は周辺に旧石器時代や縄文時代の遺跡があるんです。あまが池などがそうです。ところが台地の上にも泉が随分あるのです。新田町の重殿じゅうどのがその代表的な遺跡、泉なのですけども、そういうところには縄文の遺跡は無いのですね。これはよくよく考えてみると、その後農耕社会になって農業用水が欲しいがために作られた人工的な泉なんでしょう。それから中世の屋敷というのは周りを大きな堀で囲まれているんですが、その中から泉が湧いているなんというのもあります。これは明らかに中世の館が出

来た後に作られた人工の泉ということになります。扇状地の末端には数多くの泉があるというのが一般的な常識なんですが、じっくり歩いてみるとそう簡単な話ではなくて、自然の泉もあればいろんな理由で人間が掘った人工の泉もあるということが分かってまいりました。お近くの泉を歩いてみて、これはどういうたぐいの泉なのか確かめるのも面白いかもしれませんね。遠坂さん、井戸の話の前にさされていましたが、まいまいず井戸についてもちょっとご説明いただけますか。

## まいまいず井戸

遠坂 「まいまいず」とは多摩地方の方言でカタツムリのことで、井戸に向かって降りる道路の形がこれに似ているためにまいまいず井戸と呼ばれています。図25は東京都の羽村市のまいまいず井戸です。ここは武蔵野台地で、扇状地の上になります。表面が火山灰で覆われているため、地下水脈が深いです。そして砂礫の土質がもろくて垂直に掘ると崩れてしまうために、当時の技術ではすり鉢状に掘るしかなかったということです。そして粘土層が出てから垂直に井戸を掘る、それがまいまいず井戸です。この井戸はその形態や出土した板碑から鎌倉時代のものと伝えられています。村落の中心となって継続して使われてきたと思われま。

これと同じようなまいまいず井戸が大間々扇状地にもありました。それは笠懸町の久宮くぐさにあったと言われている井戸で、立地も武蔵野台地のまいまいず井戸とよく似た場所に立地しています。この笠懸町のまいまいず井戸のあった場所周辺は、今畑となっていますが、小さな石宮がありまして水神様が祭られています。この井戸も井げたまでをすり鉢状に掘りくぼめて、回りながら降りて水を汲んだと言われています。しかし実際に使った人がいなくなってしまい、いつ頃から使用したものかはっきりしていません。ちなみに久宮地内の井戸の深さは14~27メートルと非常に深くなっています。人は井戸を作る